

蕉風伝書における「皮肉骨」についてのノート

——『伝書古池之解』を紹介しつつ——

復 本 一 郎

一 はじめに

蕉風伝書類に目を通して見ると、時に、「皮肉骨」なる俳論用語に出くわす。発句、付合、双方において用いられているこの「皮肉骨」なる俳論用語は、俳諧専門用語ではなく、歌論、連歌論、能楽論等の先行する文学論においてもすでに用いられている。小稿では、時に、それら先行する文学論における「皮肉骨」とのかかわりにも目配りしつつ、俳論用語としての「皮肉骨」の意味内容を、『伝書古池之解』を紹介しつつ検討してみることとする。

二 『伝古池之解』の翻刻と解説

芭蕉のへふる池や蛙飛こむ水の音（出光美術館蔵真蹟懷紙による句形）の一句を、終始「皮肉骨」の視点より論じた一書がある。学習院大学宮本三郎文庫蔵の『書伝古池之解』がそれである。墨付七丁の小冊であるので、まずは、全文を翻刻してみることにする。その際、句読点、濁点等は、筆者により補うこととした。

古池之解

古池や蛙飛込む水の音

芭蕉翁

解曰、此句は、古翁一世一唱の秀逸也。俳諧に正風の眼を開き給へる処にして、風雅の至極、名人の遊ぶ処也。詩といひ、歌といふ共、皆此さかひに至るべし。いまだ此処に至らざるは、風雅に熟せざる人といふなり。

初心——皮

上手——肉

名人——骨

是、三段の遊び処也。皮は初念の趣意にして、始中終をつくすゆえに、味ふべき処なし。肉は甘み、あたゝみ有て、諸人の好む処也。骨は甘もなく、あたゝみもなく、天理自然の妙所なり。骨は名人の遊ぶ処にて、初心の耳には不面白。不面白ゆへ、聞届かず。聞届かざるゆへに、其処に至る人少し。爰は、明眼の師につきて、年月の功を待べし。以心伝心の妙幽にして、俳諧の悟道の場也。此古池も、皮肉を放れて、名人の骨理也。扱、蕉門の一大事に執

中法と云事有。尤、我家の秘法なり。此執中を不知内は、極て初心也。下手也と思ふべし。執中を伝受して、日々に工夫をめぐらし、よく行ふを上手とは可言成。古今、他門の俳諧は、始中終をいひつくして、歌にも不有、俳諧にも不有。初心の人は、すべて是也。此さかひをもしらずして、自上手なりとて高ぶるは、天利を知らざるゆへ也。蕉門の秘訓には、執「其中」と云事にて、一句に始終の二つを顯し、中は執て余情にふくむ、是を句ひと馨共いへるなり。句中の諷諫といふも此事なり。

扱、此句の妙処といふは、古池の句にも不有、蛙を題する句にもあらず。題は閑居の題にして、芭蕉菴中の閑居の吟也。此句、感吟数度に及べば、自然と寂寞の情に至るべし。問ふ人もなくあれ果たる芭蕉菴の春雨に、ひとり柱に打もたれて、来しかた行末の事共を觀念するに、庭の古池を折く蛙のづぼんくと飛込音、其淋しき、其閑さ、言語に述る処に不有。

中納言家持鵲の歌の註に、宗祇法師の曰（筆者注・『小倉色紙百人一首宗祇抄』。板本で流布）、冬ふかく、月もなく、雲もはれたる夜、霜は天に見へてさへぐたる深夜などにおき出て、此歌を思はゞ、感情かぎり不可有といへり。誠に、まのあたりの景色も眼中にたゞよひて、彼芭蕉庵に座するが如し。是は、姿を先にして、情を後にするといへる蕉門の秘訓也。姿情之伝別
卷にあり

扱、発句は寂寞、談笑の二体をもととして、姿には談笑をあらはし、情には閑情をふくむといへる。此の句も、

閑さや蛙飛込む水の音

如斯いふ時は、初心の皮の場にて、始中終をいひつくせば、風もなく、雅もなく、更に味ふべき処なし。

有時、古翁、此五文字をかくして、蛙飛込水の音、といふ七五を得たり、五文字いかゞあるべきや、と其角に相談し給ひしに、

山吹や蛙飛込む水の音

其角は、此五文字を置たり。是、むまみ、あたゝみありて、いはゆる上手の肉の場也。其角は、上手の肉を得たれども、いまだ名人の骨に至らず。其時、翁の示て曰、山吹は嬉しき五文字なれど、我正風の骨隨にあらず。詩には山吹を明朝の風といひ、歌には新古今の花にして、杜甫、西行の風雅はあらずとて、古池の五文字をあらはし給へり。其角は、其時、泪をこぼして、はじめて俳諧の骨隨をさとられたる也。

落柿舎主人去来

儀満持矩

矩儀

これで全文である。たしかに「古池之解」ではあるが、〈古池〉句を素材としつつ、蕉門俳諧の要諦を端的に示した一文と見ることもできる。

本書の内容の検討に入るに先立って、『伝古池之解』の資料的位置付けを少しく行っておきたい。

末尾に「落柿舎主人去来」と記されている。『伝古池之解』は、宝永元年（一七〇四）、五十四歳で没した芭蕉の弟子で、『去来抄』の著者、洛西嵯峨の草庵落柿舎の主人向井去来により執筆されたもの、ということになる。

さらにその後に記されている「儀満持矩」なる署名に関しては、しばらく措くことにして、ここで、もう一つの興味深い資料を掲げることにする。去来の弟子で、宝暦十年（一七六〇）、八十三歳で没している空阿なる人物の俳諧談を書き留めた『岡崎日記』がそれである。

架蔵者の大磯義雄氏によって、詳細なる「岡崎日記の研究」を巻末に付して、『岡崎日記と研究』（未刊国文資料

刊行会、昭和50・10)の中に全文が翻刻紹介されている。

『岡崎日記』全体の構成については、大磯義雄氏が、「京の当時岡崎村に隠棲する去来門人という老翁空阿を、京の宦家の士、本国出雲の広瀬茂竹が、友人これも宦家の士の吉田左助、俳名訥子の案内で往訪し、それから連日のように茂竹が空阿を訪れては俳諧の質疑応答が行われ、それを日記につけたもの」と簡潔にまとめられているところである。執筆は、宝暦八年(一七五八)から九年(一七五九)にわたっている。

ところで、私が注目するのは、『岡崎日記』中の左の一条である。少しく長くなるが、省略せずに引用してみる。

竹曰、古池の句の妙処はいかなる処にて侍るや。

答、是五文字の事也。一代一句共いふべき名句なり。翁は此句にて俳諧をさとり給へるなり。すべて杜子美・

李白・釈阿・西行などの風骨が爰なり。

名月や池をめぐりて夜もすがら

是等も其体也。此ゆへに蕉門に執中法といふ事有り。此事をしらざれば、翁の句の妙処はしりがたし。盛唐の詩の風がとんと翁の発句なり。和歌と中古の歌は大かた明朝の風也。上古の歌には翁の好む処の風骨あり。歌の事はしらねど、『万葉』に赤人の、

田子浦に打出てみれば真白にぞ富士の高根に雪はふりける

古池の句などはとんと此処也、と先師も申されしなり。『新古今』の時は、白妙の雪はふりつゝと直して入集せられしよし、一段面白はなりたれども、盛唐の詩を明朝に直したる也。是も下地の金玉ゆへ、手を入置ば一段よくは成たる物なり。然共風雅は、もとの真白にぞなるべし。古翁の俳諧の三都に合ざるも此処也。京撮の人は『新古今』を面白がりて、『万葉』の真白にぞは用ひぬなり。真白にぞをうれしがるは、中く人の人の成処に

はあらず。是はほんの俳諧なれ共、そこを面白がる人はなひ物也。大かた皆皮肉の間にて遊ぶ也。爰には大切な事侍也。

先の『書古池之解』と比較いただきたい。「皮肉骨」の措辞を含めて、論旨の共通性は、明らかであろう。「竹」は、質問者（『岡崎日記』の著者）茂竹であり、「答」は、去来の弟子空阿によるものである。とすれば、芭蕉の「古池」句をめぐる空阿の見解が、師の去来の『書古池之解』の内容と類似していても、なんら不思議はないのである。そればかりか、逆に、この事実が、『書古池之解』の執筆者が、間違いなく去来であることを証していることにもなるのである。とすれば、『書古池之解』において展開されている「皮肉骨」の論は、去来のものであるとして検討してよいことになるのである。

ただ、少しく心配なのは、去来の代表的な俳論書である『去来抄』に、「皮肉骨」の論が一箇所も見えないことである。

そこで、もう一つ別の資料を掲げてみる。蕉門（芭蕉一派）一の論客、享保十六年（一七三二）、六十七歳で没している、去来より十四歳年少の各務支考の著作、元禄十二年（一六九九）刊の俳論書『続五論』である。

寒梅といふころを

雪霜の骨となりてや梅の華

是は西華坊（筆者注・支考のこと）が千鳥をあらそひたる時の句也（筆者注・「何がし僧」の「寒ゆる夜に鉢の出来たる千鳥哉」を指す）。是さらに寒の字の鉢をいふなり。水仙を仙骨といへる詩あり。是は肌へともいふべけれど、皮肉はあたくみあるをいやがりて、古人もこのさかひに眼をくばりたるなり。かの千鳥にいへる鉢の字は殊にすこやかならず。されば梅の華の瘦てするどに、世のあたくみなきを骨といひなせるが天地の本情に

して、かつ風姿もとゝのひたりといふべし。(傍点筆者。以下の引用文も同じ)

傍点部に注目されたいが、支考は紛れもなく「皮肉」「骨」なる俳論用語を用いているのである。それよりもなによりも、右の『続五論』の一節にも見え、『伝書古池之解』にも見える「あたゝみ」なる特異な措辞である。管見の範囲では、同時代の他の諸資料で「あたゝみ」なる措辞を用いている例を、他に知らない。表現(あるいは趣向)過多を言うところの「あたゝかみ」と一般であろうが、どうも支考独自の言葉のようでもある。とすれば、『伝書古池之解』も、『岡崎日記』も、背後に支考の影が仄ほの見えてくるのである。そこで、もう一度『岡崎日記』を繙ひもとくと、空阿の、

惣じて獅子門に伝へたる物は、大方杉風や先師の方から出たれば、あまり麁(末)抹なる事になき也。翁の作にあらずなどと、破りて用ひぬは人の偏執なり。支考をねたみていふ事なり。俳学に於ては支考ほど骨を折たる物もなき也。其外漢才などもたくましき物也。皆他門からは是をねたむ也。其角の嵐雪のといへども、支考には及ぶ間敷也。

との、絶大なる支考支持、評価の言を見ることができるのである。ただ、去来は、『去来抄』においても、「風情と謂来るを、風姿・風情と二ツに分て支考は教らるゝ、尤さとし易し。」をはじめとして、支考に対しては、常にさくぶる好意的であるので、右の空阿の言をもつて、『岡崎日記』が、茂竹、訥子、空阿の三俳人ともに、いま一つ俳歴等が詳つまひらかでないことを理由に(大磯義雄氏「岡崎日記の研究」参照)、即座に支考系の俳書と断じることもしかないのである。ことは『伝書古池之解』についても同じである。先程の「あたゝみ」なるきわめてユニークな措辞にしても、『伝書古池之解』を中心に据えれば、去来の影響下に支考が用いた、という逆の結論にもなるのである(『岡崎日記』には支考に関する「江戸にては杉風は何事も問尋ね、京へ来ては去来にたよりて、蕉門の事はしられたる也。」

との空阿の支考評も見える。従来、研究者は、支考に対してあまりにも不信感を抱き過ぎていたのかもしれない。また、去来の俳論を考えるにしても、あまりにも『去来抄』のみに拘泥し過ぎていたのかもしれないのである。

我ながら歯切れの悪い物言いになってしまったが、早急に結論を出さずに、『書古池之解』は、巻末の署名通り去来の執筆になるものとしても、あるいは支考の手が入っているにしても、紛れもなく蕉風（蕉門）系の伝書としてまずは検討を加えておくのがいいのかもしれない。

ここで、保留としておいた『書古池之解』における末尾の「落柿舎主人去来」の署名のさらに後に記されている「儀満持矩」について解決しておかなければならない。「儀満持矩」なる署名が何を意味しているのか、ということである。これが、まことに面白いのであるが、例の『岡崎日記』の巻末に、

明和元年

申

儀満持矩

臘月写之

と見えるのである。すなわち、「儀満持矩」なる人物は、『岡崎日記』の筆写者だったのである。そして、大磯義雄氏の『岡崎日記と研究』の巻頭口絵写真に掲げられている「儀満持矩」の筆跡を見るに、学習院大学宮本三郎文庫蔵の『書古池之解』と、紛れもなく同一なのである。しかして、『書古池之解』も、ある原本から「儀満持矩」が筆写したものであったのである。空阿は、『岡崎日記』において、さらに、

師匠（筆者注・去来）よりゆづり申されし蕉門の伝書ども、大切に持伝へ侍り。此事は予が師匠よりふかくい
ましめて、弟子たりとも道に不信なる人にはゆづる事なかれ。

とも記している。とすれば、『書古池之解』も、その中の一冊であった可能性、はなはだ大ということになるのであ

る。なお、「儀満持矩」が、『伝古池之解』を筆写したのは、『岡崎日記』を筆写した明和元年（二七六四）十二月に程遠くない時期であつたと思われる。ちなみに『伝古池之解』にも、『岡崎日記』にも**藤本文庫**なる蔵書印が捺印されている。

三 『伝古池之解』の「皮肉骨」

そこで、いよいよ『伝古池之解』における「皮肉骨」論の検討である。

すでに、堀切実氏が、『諧許六拾遺』（天明四年序）中の「尤真行艸は皮肉骨と同じ事なれば、諸集考知るべき。」との言に着目されつつ、風体論とかかわりのある用語としての「皮肉骨」を指摘しておられるが（『蕉風俳論の研究——支考を中心に——』明治書院、昭和57・4所収）、俳諧における「皮肉骨」は、発句、付合を問わず風体論とのかかわりの中で論じられることが多いようである。が、『伝古池之解』における「皮肉骨」は、伝書そのものにおいて、

初心——皮

上手——肉

名人——骨

と明示されているように、俳諧修行（稽古）における段階論として理解、把握され、趣向論と結び付けて論じられているのである。そこで『伝古池之解』が述べるところを、その例句とともに簡単にまとめるならば、

初心（皮）

始中終の構造の俳句。味い所なし。

閑さや蛙飛込む水の音

上手(肉)

始終の構造の俳句。工夫を尽す。

山吹や蛙飛込む水の音

名人(骨)

始終の構造の俳句。天理自然の妙所。

古池や蛙飛込む水の音

ということになるうか。しかして、「始中終」から「始終」への句構造の変化(趣向)が「執中法」と呼ばれているのである。「始中終」の句構造から、「中」を「執^と」ることによって、一句に「余情」(句ひ・聲)を齎^{もたら}すというのである。

「始中終」の句構造による句作りをする初心(皮)については問題ないとして、同じ「始終」の句構造による句作りをする上手(肉)と名人(骨)の段階的区別が問題となるのであるが、そのところを『^伝古池之解』は、「甘^{うま}み」「あたゝみ」の有無によって、明快すぎるほど明快に示している。「工夫をめぐら」すか否か、である。例句の五文字で言えば、〈閑さや〉は、「始中終」の句構造であり、「余情」とすべきものを句表にあからさまに出してしまっており、「味ふべき処な」き句作りということで、問題なく「下手」、〈山吹や〉〈古池や〉は、共に「始終」の句構造ではあるが、〈山吹や〉の五文字は、「工夫をめぐら」すことによって据えられた「諸人の好む処」、一方、〈古池や〉の五文字は、「工夫をめぐら」すことなく据えられた「天理自然の妙所」ということになるのである。

ところで、かくのごとき「始中終」「始終」の句構造は、支考においても、『俳諧十論』〈第九変化ノ論〉（享保四年刊）において論じられているのである（正徳五年刊の『発願文』にも見える）。

始
五畿内に 降しら雪や つめた飯
中
古池や 蛙飛こむ水の音

されば此類は数多ながら、昔の俳諧の其三をつくせる、此外に人の聞べき情なし。姿はましていづこの雪をか詠めん。今の俳諧の其一を残して、中にさびしき情をふくめる、それを詩哥の餘情とも、文章の優美ともいへるならし。

『伝書古池之解』との類似は、「執中法」と呼ばれてはいないものの（支考において「執中法」は付合論における用語）、一読明らかであろう。先に、私は「落柿舎主人去来」の署名があるにもかかわらず、『書古池之解』を去来系伝書として扱うことを支考の『続五論』中の「皮肉骨」論（あるいは、「あたゝみ」の措辞）との類似をもって躊躇（ためら）ったのであったが、その心配は、右の『俳諧十論』における句構造論に接する時、再び頭の中を過ぎるのであるが、今は、類似性を指摘するに止め、深入りはしないことにする。なお、ここでついでに述べておくと、小宮豊隆氏が蔵されていた去来門（との自称に小宮氏是否定的であるが）止塘なる人物の伝書にも「皮肉骨之口訣」の条が見える由である（へ日本の芸術に於ける秘伝の意義）『芭蕉・世阿彌・秘傳・勘』白晝書院、昭和22・2所収、参照）。それにしても、『書古池之解』にしても『岡崎日記』にしても、そして小宮豊隆氏旧蔵の止塘伝書にしても、支考、あるいは支考系の臭が強いにもかかわらず、なぜ、去来系あるいは去来門を自称して執筆されているのであろうか。去来系を名乗った方が種々の俳壇的活動に有利だったのであろうか。支考の美濃派系の俳論書も、あるいは公刊され、あるいは伝書として、それこそ数多く残っているだけに、再び結論を導くことのできない問い掛けを蒸し返す

ようであるが、何としても、不思議でならない。

右に、しばしば脇道にそれながらも、検討を加えてきたように、『書古池之解』では「皮肉骨」が、趣向論とのかわりの中で、修行（稽古）の段階を示す用語として、「初心・上手・名人」との対応のもとに用いられていたのであったが、これは、蕉門伝書類の中でも、きわめてユニークな用法であるように思われる。この『書古池之解』における「皮肉骨」と近い意味内容を付与して使われているのが、これまでに小稿がしばしば引き合いに出してきた、『書古池之解』とはすこぶる深いかかわりのある（共に「儀満持矩」筆写本であり、空阿所持の去来伝書の一冊が『書古池之解』と考えられる）『岡崎日記』中の左の一節である。

竹問、案情に覚語（悟）ある事にや。

答、いかにも有べし。深き処は案ずべからず。浅き処にある物也。人く何ぞ珍らしき事をさがし出んとするゆへ、えもしらぬ奥をさがして、果は人の耳に届かぬ事をいひ出す也。よき句は必爰らあたりに有物也。翁の古池唐崎といふとも、何ぞふかき所ならん。皆平生体也。とかく皮肉を出て骨に入様にあるべし。

『書古池之解』が署名通り去来の著作であるとし、右の『岡崎日記』の答者空阿が、『書古池之解』を伝授された去来の弟子であるとすれば、当然のことなのであるが、右の『岡崎日記』の「皮肉骨」の論は、見事に『書古池之解』と重なるのである。茂竹の問に「案情」とあるごとく、右の問答は、間違いなく趣向論としてのそれであり、「皮肉を出て骨に入様にあるべし。」の部分には修行（稽古）の段階論の用語としての「皮肉骨」をも窺知し得るのである。「骨」が「平生体」（この辺、風体論とのかかわりも窺える）故に「初心の耳には不面白。不面白ゆへ、聞届かず。」（『書古池之解』）ということになるというわけである。しかして、類縁の書としての『書古池之解』と『岡崎日記』の間に、あたりまえのことながら、齟齬するところは、全くない。

ここで、先行の文学論の中に修行（稽古）の段階論の用語としての「皮肉骨」を見ておくならば、世阿弥の能楽論で、応永二十七年（一四二〇）、世阿弥五十八歳の折の『至花道』（皮肉骨事）の中に、それを見ることが出来る。そもそもこの芸態に、皮・肉・骨の在所をささば、まづ下地の生得のありて、おのづから上手に出生したる瑞力の見所を、骨とや申すべき。舞歌の習力の満風、見にあらはるところ、肉とや申すべき。この品々を長じて、安く、美しく、窮まる風姿を皮とや申すべき。

『至花道』が、世阿弥みづか自らが言っているように「稽古の浅深の条々」を述べることを目的としている伝書であるので、右の「皮肉骨」論が演技論としての側面を有しつつも、私が言うところの修行（稽古）の段階論としてのそれであることは、言うまでもない（能勢朝次氏は、演出論として理解されている。『能勢朝次著作集』第五巻、思文閣出版、昭和59・9所収〈思想家としての世阿弥〉参照。）。論は、右から、さらに発展するのであるが、小稿では、あくまでも蕉風伝書における「皮肉骨」の意味内容を検討することを目指しているので、その部分は、省略に従う。右の部分を『伝古池之解』に倣って、簡略に示すならば、

骨——下地

肉——習練

皮——自在

ということになるうか。修行（稽古）の段階を示す用語としては、「肉」を中にして、「皮」と「骨」が、『伝古池之解』と『至花道』では、全く逆の段階に位置付けられているのであり、なおかつ『伝古池之解』における「皮」が無価値であるのに対して、『至花道』においては、「骨」も「肉」も「皮」も、それぞれ固有の価値あるものとしての意味内容を付与されているのである。これは、能という芸態が「見」（見所）ということを中心することと無関係

ではないと思われる。イメージとして、「皮」を至上のものとして把握するか、「骨」を至上のものとして把握するかである。しかし、同じく修行（稽古）の段階論の用語として用いられている「皮肉骨」ではあるが、『書古池之解』（俳論）と、『至花道』（能楽論）の間には、ジャンルの相違ということも関係していると思われるが、大きな逕庭があるのである。

四 風体論としての発句の「皮肉骨」

次に、最もオーソドックスな、発句における風体論の用語としての「皮肉骨」を見てみることにするが、それ为先立って、風体論としての「皮肉骨」の源流ともいべき歌論『愚秘抄』（鶴本）における「皮肉骨」の記述を見ておくことにしたい。『愚秘抄』は、定家に仮託された偽作の歌論書であり、二条派庶流の手に成ったと考えられている。『愚秘抄』における「皮肉骨」は、道風、佐理、行成の書風を具体的に例示しながらの「手跡の事」としての風体論であるが（そして、先の『至花道』の記述も、この『愚秘抄』の影響を受けていると思われる。金子金治郎氏は『愚秘抄』に先行するものとして、書論『定家卿筆諫 訣』を指摘しておられる。『連歌論の研究』桜楓社、昭和59・6参照）、今は、便宜、前半部を省略して後半部のみを引用してみる。

強きは骨、やさしきは皮、愛あるは肉なるべし。各得てもろはにかけるはなし。一體を得てかくは得也。不得ところは失也。此三の中には先骨を得たらむぞ誠の姿にて侍るべき。いかに愛ありとも、やさしくとも、骨のなからんは、よもいみじからじとぞおぼゆる。先は人の體にも骨こそ五體の根本として命源にて侍れば、もともすぐれたるたぐひなるべきにや。されば何れのわざにも強き姿を先として可_レ學。歌も又如_レ此なるべし。

先に述べた如く、『至花道』は、この『愚秘抄』に拠っていると思われるものの、右のごとく『愚秘抄』においては、「皮」重視の『至花道』とは異なり、「骨」が「命源」として重視されているのを見ることができるのである。もともと「骨」重視といっても、『伝古池之解』における修行（稽古）の段階論における「骨」重視とは、その意味するところを異にするものであることは、確認しておかなければなるまい。右の『愚秘抄』そのものの言わんとするところは明瞭であるので、贅言を費すまでもないであろう。以下、『愚秘抄』を念頭に置きつつ、蕉風伝書、あるいは俳論書における「皮肉骨」を追い掛けてみることにする。

まず、これは伝書ではないが、はやく、元禄十年（一六九七）に公刊されている挙堂の俳諧作法書『真木柱』に注目してみることにする。挙堂その人に関しては、不詳。芭蕉門句空の『干綱集』（宝永元年序）に、『真木柱』の序を書いている朋水の「伏見の挙堂をとひまかりけるに」との文言が見えるので、京伏見住の蕉門系の俳人であることが知られる。

▲ 半松齋ノ云、皮とハ風体、肉とハ詞の事なり。骨とハ心の事なるべし。

皮	雪の日や船頭殿のかほのいろ	其角
肉	有明の面おこすやほとゝぎす	同
骨	木がらしや沖より寒き山のきれ	同

半松齋は、連歌師宗養のこと。天文二十四年（一五五五）成立の宗養著『連歌秘袖抄』（連歌論）より引用して「皮肉骨」の説明にあてているので、其角の例句を掲出してはいるものの、挙堂自身の「皮肉骨」に対しての確たる見解はなかったであろう。

ただ、其角の例句三句は、半松齋（宗養）の「皮肉骨」の見解によく対応した句ぶりのものが選ばれているとい

つていいであろう。すなわち〈雪の日や〉の一句は、其角の俳諧雑話集『雑談集』（元禄五年刊）に所収のものであるが（『阿羅野』『五元集』等にも見える）、その『雑談集』の注釈書である石河積翠（享和三年没、六十六歳）の『雑談集評』（天理図書館綿屋文庫蔵）に、

白雪のふりける日も、夏の日くろみ其まゝに、船頭の顔色の黒きを見て、寒暑にいとなみしげき有さまをあはれむおもひを自然居士の謡のこと葉をとりて云出たり。（頭注に「自然居士の謡に船頭どの、御顔の色こそ直つて候」と見える）

とあるごとく、謡曲「自然居士」の詞章を踏まえての謡曲調俳諧であり、「皮とハ風体」に対応するし、〈有明の〉の一句は、莊丹（文化十四年没、八十四歳）の『晋子発句撮解』（寛政八年成）に、

長嘯拳白集逆衣に大和うた好せたまふ大臣云々月花も面おこすべき時なれやとあり。

とあるごとく、当時愛読されていた木下長嘯子の『拳白集』（慶安二年刊）中の和文「さが衣」における「やまとうたこのませたまふおとゞにて、春秋の色にふかうおもひしみ、をりにつけたる御口ずさみ、こゝら世にとまりけん。まことに月花もおもておこすべき時なれや。」中の「おもておこす」の言葉にこだわっての句作りということで、「肉とハ詞の事なり」に対応するし、〈木がらしや〉の一句は、特に典拠と見做すべきもののない句であり、「骨とハ心の事なるべし」に対応する、ということであろう。「皮肉骨」が、拳堂において風体論の用語として理解されていたことを窺うには適切な例句であると評価してよいと思われる。

ここで、ついでに、拳堂が拠っている宗養の『連歌秘袖抄』との共通点を有しつつ、かなり長文での説明が見られる室町中期の連歌論書『連歌諸躰秘伝抄』（作者不詳）中の「皮肉骨」の説を、木藤才蔵氏校注『連歌論集 一二』（三弥井書店、昭和57・11）によって引いておくことにする（木藤才蔵氏は、『連歌諸躰秘伝抄』が、『連歌秘袖集』

に先行するものと見ておられる)。

一、皮肉骨の三躰

此躰は、一句のすがた沓冠を能々かけ合て、序のことばを枕にして、用のことばを腰に入、体の意趣を踏まへさせて、心に骨を入、ことばに肉を入、こはきにはてにはをもつていひかざり、皮とするなり。是大切の躰といへり。

一、肉の躰

是は人の作意をへつらはず、思ふ心を皮にてもかざり候はず、句にさほど骨がましくはあらで、肉よりあらはにいひ出し、前句の心を一所とりつめて付くるなり。

一、骨の躰

是は、いづれのにても、骨の心を主として句作をばするもの也。思ふ心をあらはすを肉といひ、殊皮肉骨の心をつかうべきもの也。

かく、量的には多いので心惹かれるのであるが、文意、項目立て等、もう一つ不明瞭なところが多いので、いちの検討は避け、あくまでも参考ということにしておきたい。

次に、宝暦十一年(一七六一)、八十二歳で没している其角門の俳人晋流の、寛延四年(一七五二)跋の『蕉門録』の中の記述に注目してみることにする。『蕉門録』、稿本として伝わるが、公刊を意図しての一書であったようである(矢部保太郎氏説)。今、俳文学会刊の『未刊連歌俳諧資料 第二輯2』によって、該当箇所を引用してみる。

蕉門一心三観大意

皮

一句駄用を飾り、理明らかに面白味をあらはし、風俗はなやか成べし。

頓て死ぬけしきも見へず蟬の声

芭蕉

名月や疊のうへに松の影

其角

ていたらくみな脱キ捨て柳哉

晋流

肉

一句駄用を飾らず、趣意を表にあらはさず、内に多情を含み、意味専なるべし。

文月や六日もつねの夜には似ず

芭蕉

疱瘡の跡ははるかに熾哉

其角

炭竈や里は女房の夕烟

晋流

骨

一句駄用表にあらはさず、趣向もなく、内に含みたる余情も非ず、風俗を飾らず、理屈をはなれ、面白味を去ル天然の本性ならむ。

枯枝に烏のとまり鶯秋の暮

芭蕉

櫻ちる彌生五日はわするまじ

其角

ちる物は吹にも依らず竹の皮

晋流

風体論としての「皮肉骨」に対して簡明な説明が施されている。先にも記したように、晋流は、其角門であるが、右の「皮肉骨」は、すでに見た『伝古池之解』における俳諧修行（稽古）における段階論としての「皮肉骨」、あるいは、その中に例句を通して窺知し得た趣向論としての「皮肉骨」に極めて近い理解が示されている。ということとは、蕉門内において、「皮肉骨」に対して、先行の歌論、連歌論、能楽論等とはかかわりなく、ある程度共通する概念理解があったと見てよいのであろうか。あるいは、晋流は『蕉門録』によれば、支考とも交流があったことが知

られるので、支考の「皮肉骨」理解の影響下での右の説明ということなのであろうか。『伝書古池之解』が、支考系の伝書ということであれば、このように考える時、『伝書古池之解』と『蕉門録』における「皮肉骨」の意味内容に共通するものがあることは、至極当然ということになる。蕉門内に発句における「皮肉骨」に対しての共通理解があったにしても、支考の「皮肉骨」理解が広範囲に流布していたということであつたにしても、「皮肉骨」の意味内容の共通性ということは、注目してよい現象であらう。この『蕉門録』と『伝書古池之解』の、「皮肉骨」理解に対する大きな相違点を指摘しておくならば、一方が修行（稽古）における段階論としてのそれ、一方が風体論としてのそれという用法上の違いともかわりがあるが、「皮」が、『伝書古池之解』では「初心」（下手）を意味するものとして片付けられていたのに対して、『蕉門録』では、風体の一つとして、然るべく評価されているということである。もう一点、気になるのは、『蕉門録』の「骨」理解で、「面白味を去ル天然の本性」と記して、『伝書古池之解』における「天然自然の妙所也」「初心の耳には不面白」との理解とすこぶる近い見解を示しながらも、「内に含みたる余情も非ず」と「余情」を否定してしまっていることである。『伝書古池之解』では、「一句に始終の二つを顕し、中は執て余情にふくむ」とあつたように、「余情」は、「骨」の重要な要素として指摘されていたのである。晋流の「皮肉骨」論が、臍人なる俳人の序に見えるごとく、あるいは、晋流自ら『蕉門録』卷之第二の巻頭で「風羅翁、六種サの道筋をたどり、八品の風俗をあらかしめ、三観一心の餘情より皮肉骨の三ツをさとして、正風雅の基ひを養育し、密に宝晋斎（筆者注・其角）に附属し給ふ」と述べるごとく、師の其角から学んだものであつたとしても、あるいは、そうではなくして、支考から学んだものであつたにしても、「骨」において「余情」を否定してしまつたのは、恐らく晋流の理解不足ということであらう（例句として掲げられている芭蕉の「枯枝に」の句など、晋流は如何に解していたのであろうか。写生句のごとき理解であらうか）。

もう一例、元文五年（一七四〇）、七十八歳で没している蕉門野坡の伝書『野坡実語録』における「皮肉骨」理解を、大内初夫氏編の『蕉門俳論集 続』（古典文庫、昭和54・8）によって左に掲げてみる。

発句皮骨躰

骨 菜を拾ふ鹿哀也市の秋

伝に、本性を述たるよし。

皮 幾嵐さか毛吹夜や鹿の声

伝に曰、其かすかなるをのべたり。

躰 角尺におくるゝ声や岨の鹿

伝に曰、丸めて情をのべたり。

骨肉

骨 藤戸道化シロかく人に尋けり

伝曰、是は藤戸の浦にての吟也。盛綱が昔を、今しろかく人に尋ねし処、骨也とぞ。

肉 此浦の花も青葉も月頭

伝曰、是情をうつしたへたる所、肉なりとぞ。

『蕉門録』とは少しく趣を異にする風体論としての「皮肉骨」であるが、一部、共通理解があるようにも思われる。

例句の出典については未詳。あるいは『野坡実語録』のためのものか。「発句皮骨躰」における例句は、「鹿」がテーマ、「骨肉」においては「藤戸の浦」がテーマ（と見てよいであろう）である。同一テーマによって理解を容易

ならしめようとの配慮であろうと思われる。ところで、『野坡実語録』「皮肉骨」ではなく、「皮骨𦵑」とし、さらに「骨肉」の項目を挙げて^あいるが、ここでの「𦵑」は「肉」と一般と見てよいように思われる。しかして、「骨」を「本性を述べたるよし。」と説くところは、『蕉門録』の「天然の本性ならむ。」に通うものであろうし、「𦵑」を「丸めて情をのべたり。」と説くところは、『蕉門録』の「肉」の「内に多情を含み」に通うものであろうし、『野坡実語録』の次項の「肉」の説明「是情をうつしたへたる（筆者注・耐へたるの意か）所」との接点も見出し得るのである。ただ「皮」を「其かすかなるをのべたり。」と説くところは、『蕉門録』の「皮」の意味内容と逕庭がある。むしろ、歌論『愚秘抄』の「皮」の説明「やさしきは皮」に近いものと言ってよいであろう。ただ、『野坡実語録』は、あくまでも一般用語としての「皮」のイメージに拘ったことによる（野坡の）独走であつたのかもしれない。例句は、難解なものではなく、（野坡の）「皮肉（𦵑）骨」理解の所在を助けてくれるわけであるが、「𦵑」の例句「角尺に」の「角尺」は、「長さ尺の角」（諸橋轍次氏『大漠和辞典』参照）であることは、確認しておいたほうがよいであろう。なにはともあれ、種々錯綜する発句における「皮肉骨」の意味内容であるが、各伝書（あるいは俳論書）間において、概ね同一の理解が成されていたと結論してよいであろう。このことは、「皮肉骨」に対する秘伝の部分での芭蕉の見解が流布していたということであるのか、支考の「皮肉骨」理解に対する喧伝力が広範囲において滲透していたということであるのか、去来、其角、野坡の伝書にかかわるので問題の残るところであるが、早急に結論を出す必要もあるまい。『伝古池之解』『蕉門録』『野坡実語教』の「皮肉骨」論において、共通項がいくつかあったことを確認しておけば、所期の目標は、遂げられたことになるであろう。

五 付合における風体論としての「皮肉骨」

以上、発句における俳論用語「皮肉骨」について検討を加えてきたのであるが、付合においても、しばしば、付句の風体が「皮肉骨」によって説明される。これは、連歌論の直接的影響と思われるが、具体的な諸用例に当たってみることにする。

まずは、『聞書七日草』である。飯野哲二氏旧蔵竹童述作本には、芭蕉の教えを、図司呂丸が書き留めたものとあるが、はやくから支考臭も指摘されている。最近では、南信一氏が、山崎喜好氏、朝倉尚子氏、東聖子氏等の研究を踏まえながら、「竹童一派の偽作」との結論を出しておられる（『總釈 支考の俳論』風間書房、昭和58・7参照）。竹童は、美濃派系の俳人である。すでに見た『伝書古池之解』にしても、『蕉門録』にしても、そして、この『聞書七日草』にしても、どうも、支考の影がちらちらするのであるが、今は、そのことに深入りすることは避け、直接内容の検討に入っていくことにする。テキストは便宜、俳文学会刊『未刊連歌俳諧資料 第四輯3 七日艸』に拠る（句読点、濁点等は、筆者が任意に増補した）。飯野哲二氏旧蔵竹童述作本よりも「皮肉骨」への記述が詳細な光丘文庫本を底本としていることによる。

三昧の心得埋木の聞書也

皮

皮は外也。ソト万事符合してみだれず。かざり、具足したるや。

わか浦にしほみちくればかたをなみあしべをさして田鶴啼わたる

埋木荷に念いるゝ大はかのしゆく

本膳はいとそさう成るはたごにて

追加 蕉門

桐の木高く月さゆるなり

門しめてだまって寐たる面白さ

肉

肉は肉也。おこなふ也。味ひ也。

ほのぐとあかしの浦の朝霧に嶋がくれ行舟をしぞ思ふ

埋木普賢の前によめるほけ經

鶯の聲は桜のこちらにて

追加 蕉門

星さへ見へぬ二十八日

ひだるきはことに軍の大事也

骨

骨はまこと也。俊成卿は定家卿の骨髄なることを見さだめ給ひて、その身の肉髄をきはめ給ふと也。

立かへり又も此世にあとたれん名もももしろき和哥の浦波

埋木からりくとからめきぞする

山枳とこせうをいれて摺小ばち

胡椒

追加蕉門

わが手に脈を大事がらるゝ

後よひの内儀はこんど屋敷にて

飯野哲二氏旧蔵竹童述作本『聞書七日草』（以下『聞書七日草』と記す）に、芭蕉の言として「我等も先師より聞覚申候に、へ皮肉骨の付合と、へ四道と申心得これあり候。はなし申べく候。」と見えるので、光丘文庫本『七日艸』（以下『七日艸』と記す）に、右のごとき詳細な「皮肉骨」にかかわる記述が見えることは、矛盾するものではないが、『聞書七日草』が「皮肉骨附合」として付合例三例を掲げている（三例省略）その三例と、右の『七日艸』における「追加蕉門」として掲げられている三例の付合とは、一例も一致するものを見ない。この辺が、伝書の不安定さであろうか。ちなみに『七日艸』が、「埋木の聞書」と記し、「埋木」の項に掲げる三例の付合は、北村季吟の俳論書『埋木』（延宝元年刊）中の「皮肉骨の俳諧」の項（説明はない）に掲げられている三例の付合である。『埋木』と芭蕉のかかわりの深さは、すでに尾形 仿氏の論じられるところである（同氏「芭蕉と『埋木』」「連歌俳諧研究」第十三号、昭和32・3、『季吟俳論集』古典文庫、昭和35・2参照）。かくて、『聞書七日草』において芭蕉が、先に記したごとく「我等も先師より聞覚申候に云々」と記す「先師」とは『七日艸』と『聞書七日草』を重ね合わせての範囲では、季吟と特定し得るのである。

ところで、『七日艸』における付合用語としての「皮肉骨」それぞれの説明、「皮は外^{ソト}也。万事符合してみだれず。かざり、具足したる也。」「肉は肉也。おこなふ也。味ひ也。」「骨はまこと也。」「は、すでに見た発句における俳論用語としての「皮肉骨」、例えば、『蕉門録』における「皮」の「一句駄用を飾り、理明らかに面白味をあらはし、風俗はなやか成べし。」「肉」の「内に多情を含み、意味専なるべし。」「骨」の「天然の本性ならむ。」の各々の説明

と比べる時、発句と付合という形態上の大きな相違はあるものの、概念上、共通するものがあることは、明らかであろう。結論を出すことはまだはやいが、各種伝書類、俳論を通して見た発句を論じる用語としての「皮肉骨」が、その使用形態において多様性を有しながらも、概ね共通する意味内容のもとで用いられていたのと同様、付合を論じる用語として用いられた場合にも、そのようなことが言えそうなのである。

ここで『七日艸』が掲げる蕉門の付合例三例に注目してみる。それぞれの出典に当って、用字等を整えて、左に記してみる。各付合の末尾のカッコ内が出典である。

皮

桐の木高く月さゆる也

野坡

門しめてだまつてねたる面白さ

芭蕉

(『炭俵』へむめがゝに)歌仙)

肉

星さへ見えず二十八日

孤屋

ひだるきは殊軍の大事也

芭蕉

(『炭俵』へ振売の)歌仙)

骨

わが手に脉を大事がらるゝ

芭蕉

後呼の内儀は今度屋敷から

支考

(『続猿蓑』へ猿蓑に)歌仙)

付合例が『炭俵』（元禄七年刊）『続猿蓑』（元禄十一年刊）であるというのは、『聞書七日草』の竹童の識語が「故翁羽黒参籠之日、露丸子聞書又は遠山子同座ノ物語ヲ記ス。」（すなわち元禄二年のこと）とあるのと、明らかに矛盾する。

それはそれで、伝書の曖昧さということでも無視するとしても、ここで、またまたクローズアップされてくるのが支考である。『七日艸』中の「皮肉骨」が、風体論としてのそれであり、付合の方法の多様性を示しているものであるとしても、「皮肉骨」中、「骨」が至高の風体の位置を示めることは、発句における「皮肉骨」論に目配りしつつ『七日艸』の説明を読めば、一読明らかであろう。その「骨」の付合の付句の作者として、芭蕉ではなくして、支考が位置しているのである。やはり、俳論用語としての「皮肉骨」は、先に『野坡実語録』を検討したものの、支考、あるいは支考系（美濃派）の俳論用語として誕生、流布していったのか（すでに支考の『続五論』中に「皮肉」「骨」なる言葉を見たのであったが）と思われるのである。

もっとも、右の『七日艸』中の三例の付合中、「骨」も含めて二例までは、支考の論敵露川の伝書中にも見えるのである。享保六年（一七二一）写、大内初夫氏蔵の『俳諧相伝名目』がそれである。大内初夫氏編『蕉門俳論集 続』（古典文庫、昭和54・8）によって左に引いてみる。

付方流行不易

皮 霰の玉をふるふ蓑の毛

鳥や籠る鵜飼の宿の冬の来て

肉 星さへ見へぬ二十八日

ひだるさは殊に軍の大吏也

骨 我手に脉を大夏がらるる

後呼の内儀は今度屋敷から

「皮」の付合例を除いて、「肉」「骨」の付合例は、『七日艸』と一致する。となると、「骨」の付合例の付句の作者が支考であることによって、「皮肉骨」論の誕生、流布を即座に支考、あるいは支考系の俳人とのかわりにおいて処理してしまうことは、少しく早計であるのかもしれない。ちなみに「皮」の付合例は、『曾良俳諧書留』他に収録されている「温海山や」歌仙中の付合である。露川が、如何にして、はやく、この付合を知ったかは不明。前句が曾良、付句が芭蕉である。

ところで、この『俳諧相伝名目』中の付合三例を「皮肉骨」とのかかわりで詳細に説明したものがある。東北大学狩野文庫蔵の伝書『俳諧風雅辨 附俳諧夜話草』がそれである。『俳諧夜話草』の部分に見える。伝来、筆写者等は、一切不明である。該当箇所を掲げてみる。

皮肉骨

皮

丸雪の玉を振ふみのゝ毛

柳簾鶉飼の宿に冬の来て

皮とは前句を、^(ママ)人を鶉飼の冬籠と見て、寒き心ヲ付たるなり。

肉

星さへ見へぬ二十八日

ひだるきは殊に軍の大事也

此夜の闇、星さへ見へず闇き廿八日を、夜軍と思ひ寄て付たる也。皮の案じにはあらず。肉と云。

骨

我が手に脉を大事がらるゝ

後呼の内儀は今度やしきから

我が手に脉を大事がると云、死ともながる人と見る。此はいづれも骨に入て、前句を案るに、後妻はやしきから全ても持てきて、夫故、死ともながる云内證を見出して、思ひがけなき付也。世間の目には、病人となくは見へぬ前句をかく骨に入て姿を見出す、是骨の付なり。

右、真行草、皮肉骨の六、真は骨、行は肉、艸は皮と可心得。

「皮」の付合の付句「鳥や籠る」の上五が「柳簾」やなぎかたとなつてゐるが、このような句形も伝わつていたのである。この上五の相違によつて、『俳諧相伝名目』と『俳諧夜話草』が、直接にはかわりを持つものでないことは明らかであるが、同一の三種の付合によつて「皮肉骨」を説明している点は、やはり注目してよいであらう。

先に述べたごとく、堀切実氏は、『誹許六拾遺』中の「尤真行艸は皮肉骨と同じ事なれば、諸集考知るべき。」との記述によつて「真草行」と「皮肉骨」とのかかわりに注目されていたが、ここでは、「真は骨、行は肉、艸は皮」と、その理解の一つが明記されているのである（ただし、対応が的確か否かは、小稿では触れないことにする）。ただ、「皮肉骨」の説明が、付筋の説明に終始している感があり、詳細なわりには、「皮肉骨」それぞれの意味内容の把握には、今一つ有効な資料とはなり得ていない憾みがある。それでも、「皮」がストレートな付筋の風体、「肉」が「案」を重視した付筋の風体、「骨」が「思ひがけなき」（意外性）付筋の風体を言つたものようであることは、何とか読み取れる。そして、そのような説明が、先の『七日艸』における「皮肉骨」の説明と、さほど逕庭がない

ものであるということも指摘してよいのではなからうか。

もう一例、付合風体論としての「皮肉骨」の記されている資料を紹介して小稿を閉じることにする。その資料は、静岡市文化財資料館蔵の『杉風翁傳書』である。書名通り「杉風曰」と書き出される芭蕉の弟子、享保十七年（一七三二）、八十六歳で没した杉風の伝書である。

又曰、姿情心の三つ発して皮肉骨となり、節分をなす。上を真行草と名付、其根元は一氣也。

皮付 人とわれとに秋ふたつあり

萩原や隣りも風の夕にて

肉付 孕む子だにも袖おほふ也

芒花咲野辺の兎が月を見て

骨付 氷を見しも剣なりけり

池寒き汀に鴛鴦が羽を敷て

ここにおいても「皮肉骨」と「真行草」とのかかわりが指摘されているが、小稿では、先にも述べたごとく、そこまで論を発展させない。この『杉風翁傳書』で注目すべきは、「姿情心」と「皮肉骨」とが対応して説かれている点である。この対応を素直に解せば、

皮——姿

肉——情

骨——心

ということになろう。これまた、『蕉門録』はじめ、私が小稿で検討を加えてきた風体論としての「皮肉骨」の意味

内容と矛盾することなく重なるのである。なお、例示されている三種の付合例は、宝暦九年（一七五九）公刊されている芭蕉伝書『袖珍抄』における「皮肉骨の連哥」における付合例と、多少字句の違いがあるものの一致する。出典は未詳であるが連歌作品の付合ということである。

六 ま と め

以上、蕉風伝書類を中心として、俳論用語としての「皮肉骨」を追い掛けてきた。少なくとも、小稿で採り上げた資料の範囲では（まだまだ調査不十分であるのでノートと題した）、先行の文学論中、歌論、能楽論とは没交渉であり（意味内容に大きなずれが見られる）、一部に連歌論の影響がわずかながら窺えたわけである。それでも、贅言を費した『伝書古池之解』では、他の諸伝書、諸俳論書が、発句、付合を問わず、終始、風体論の用語として「皮肉骨」を用いていたのに対して、趣向論がらみで、俳諧修行（稽古）の段階論の用語として用いられている点は、能楽論と遠くかすかに呼応しつつ、注目されたのであった。

去来系伝書、其角系伝書、野坡系伝書、露川系伝書、杉風系伝書と、芭蕉の直弟子達の多くの伝書に見えた「皮肉骨」の記述であるが、そこに、不思議なことに支考の影がちらちらすることである。と言っても、当の支考の公刊されている俳論書の中で、正面切って「皮肉骨」を論じているものはない（せいぜい小稿で触れた『続五論』の記述ぐらいのものである）。季吟の『埋木』が芭蕉の愛読書であってみれば、事実、芭蕉の口から、芭蕉流に理解、発展させた「皮肉骨」の論が、文字通り秘伝として洩れて、直弟子間に伝播していったものであろうか。系統を異にする諸伝書、諸俳論書の「皮肉骨」の概念に大きな相違がないということは、そのことを裏付けているのである。

うか。このことが最後まで、大きな疑問として残った。結論を急がずに、今後とも丹念に使用例を探していくことにする。

(平成元年(一九八九)十月二十七日了)

*小稿を成すにあたって学習院大学宮本文庫、天理図書館綿屋文庫、東北大学狩野文庫、静岡市文化財資料館の蔵書を使わせていただきました。記して御礼申し上げます。また、御配慮賜りました諏訪春雄氏、仁平道明氏に深謝申し上げます。

〔付記〕 浮生の『原俳論』(宝永四年刊)に見える俳人評用語としての「皮肉骨」は、歌論『愚秘抄』の影響であろうか。小稿と直接関係はないが、記しておく。